

国際会議体験記

One Young World Summit & 日中韓ユースフォーラム 法学部4年 久保 まりな

ナマ☆ステ！さむいさむい冬のデリーより、法学部4年次の久保まりなです。いま私はインド・デリーに、ヒンディー語を学ぶために留学をしています。しかし今回ここに書かせていただくのはインドのてんやわんや生活についてではありません。私が過去に参加した、2つのユースフォーラムについてです。ユースフォーラムとは、若者が集まってお友だちづくりをしたり、色々な問題に対して意見を交換したりするイベントです。私が参加したものは、ひとつは「One Young World Summit」もうひとつは「日中韓ユースフォーラム」という名前です。前者は参加者として、後者は運営として関わりました。どちらのフォーラムも、ものすごく刺激的で、とても楽しいです。行く価値が大いにあります。だからここでお伝えしたいことはただ1つ、「ユースフォーラムにぜひ参加してみてください！」ということです。

「そんなイベントに参加するなんて////久保さんって賢いのね////」という素敵な誤解を抱いてくださる方がいるかもしれません。そのままそう思っただけるとうれしいのですが、残念ながら私がこの2つのユースフォーラムに参加した動機は、「タダで海外にいけるぜえ」というよこしまなものでした。そんなものでよいのです、動機は。行った先にはたくさんの驚きと学びが待っているのですから。それでは2つのユースフォーラムの紹介をはじめます。

日中韓ユースフォーラム

期間：2013年9月16日～21日（筆者3年次）

場所：日本・札幌

参加者：日中韓の大学生

参加費用：自己負担0円（各国の国連協会が支援）

2年次の夏休み前、クラス担任の先生から「タダで韓国に行きませんか」と言われました。そんなものは行きたいに決まっているので「行きますううう」と即座にお返事したら、そこから日中韓ユースフォーラムとの1年間のお付き合いが始まりました。

先生が気前のいいおじさんで私がただの無鉄砲野郎というわけではありません。あるユースフォーラムが2013年に札幌で開かれることが決定し、1年間その準備と運営を行う現地の学生が必要になったのです。そこで2012年には韓国で開催されているそのフォーラムへ札幌の学生を視察に送ろうということになり、先生はそこで私に声をかけてくださったのです。私は韓国も行きたかったが大きなイベントの運営にも興味があったので、そのフォーラムの運営に関わることも含めてお誘いをお受けしました。そのフォーラムは「日中韓ユースフォーラム」というものです。

日中韓ユースフォーラムとは、日本・中国・韓国にある国連協会（国連のA級民間諮問機関、らしいです）というところが、3カ国の持ち回りで年に1回開催しています。開催の目的は、未来を担う若者たちの相互理解を進めること、そして、長期的かつ世界に開かれた日中韓の協力体制をつくることです。主なプログラムは、模擬国連・シンポジウム・文化交流・観光の4つです。参加するのも運営を担うのも学生です。このフォーラムには日中韓から約80名の学生が参加しますが、模擬国連がプログラムに含まれているだけあり、その多くが模擬国連の経験者でした。

私は第4回目のフォーラムに、運営側の北海道事務局長という立場で関わりました。そもそも運営側には、実際の国連と同じように事務総長というトップの学生やそれを補助する学生が置かれます。しかし事務総長は東京にいたので、開催地での準備を効率的に進めることができません。ということで私が現地で活動する者を組織し、彼らのリーダーとして現地で準備を進めたり東京や関西にいるスタッフと現地を結んだりする役割を担っていました。

韓国大会視察から帰国後、視察に行った6名（札幌大学4名、北大2名）を中心に帰国報告会を開き、北海道事務局のメンバー集めをしました。そうして北海道事務局が本格始動してからは、フォーラム開催に関わるハード面の準備を行いました。たとえば、会場・宿泊施設の選択と提案、北海道からの参加者集め、彼らを対象にした勉強会の企画運営、オフィシャルポスター作り、一般観覧の広報、観光プログラム作り、当日ボランティアの募集、当日ロジ作り、物品と食事の手配・・・などです。日中韓ユースフォーラムは北海道内での知名度がとても低かったので、広報に特に力を入れていました。またせっかく北海道での開催なので、参加者に北海道のよさを知ってもらうことにも力を入れていました。

北海道事務局長をつとめて学んだことは3つあります。1つ目は、国際的なイベントにおけるおもてなし精神の重要性です。このフォーラムでは会議の内容以外の部分で北海道の良さをアピールしたことが、結果としてイベントそのものの充実と、それに伴う参加者の満足度向上につながりました。

2つ目は、組織運営とイベント運営のノウハウです。組織運営にはほんとうに様々な課題が伴いました。しかしそれらを改善すべく、代表として何をすればよいか必死に考え、時にはプロにも助言を求めました。そしてそれらを実行し、フォーラムの成功に向けて組織がうまく稼働するよう力を尽くしました。このような工夫と努力は、これからどんな組織のリーダーになるにあたって役立つことだと確信しています。またこのフォーラムは、関係者が様々な場所にたくさんいて予算にタイトな制限があり、自分たちに決定権はないが自主性や独創性が求められるという、自由に活動しづらい環境のもとでの運営でした。そして北海道事務局の代表は現場監督という仕事の性質上、現場の事情と運営側の要望に挟まれることが多くありました。また事務局員は多くがJCKを見たことがなく、かつ代表である私の統率力が不足していたため、全体的なモチベーションの低下がみられる時期がありました。よって事務局員のモチベーション維持にも気を配らなければなりません。そのような環境のもとでいかに充実度の高いフォーラムを作り上げることに貢献できるか頭をひねらせることは、チャレンジングな経験であったし憔悴することも多くありました。しかし、だからこそ面白みや達成感を感じることができ、組織運営やイベント運営に関して肝となる要素を学ぶことができました。

そして3つ目は、チャンスは自ら掴むものだということです。先に述べたように、私は先生からのご提案をうけて日中韓ユースフォーラムに関わるようになりました。運営そのものが刺激的な経験だったうえ、そこから波及して日中韓の政治や宗教について興味を持つようになり、また12月にはJENESYS 2.0という日韓交流事業にも参加しました。一つのチャンスをつかんでそれに一生懸命取り組み結果を出せば、それを見ている方々が新たなチャンスを与えて下さいます。今まで知らなかった情報が入ってきて、新たなチャンスに気づくこともできるようにもなります。こんなに面白く、素晴らしい環境があるでしょうか。しかしこの環境を生かすか殺すかは自分次第です。興味を持ったことには足踏みばかりしていないでえいと飛び込む力は、必ず大きな結果を招くものだと考えるようになりました。

One Young World Summit

期間：2014年10月15日～18日（筆者4年次）

場所：アイルランド・ダブリン

参加者：18-30歳の若者

参加費用：自己負担0円（スポンサーによる支援）

One Young World Summitのすごいところは、開催規模がものすごく大きいところです。世界190カ国から1300人の若者が集まります。そして多数のBIGなゲストが講演をしに来てくださいます。例えばNASAの宇宙飛行士ロン・ギャラン、ユニリーバのCEOポール・ポルマン、前国連事務総長コフィ・アナン、そしてノーベル平和賞受賞者モハメド・ユヌスなどです。これらの情報を読んだだけで、すでに参加したくなっただけの方がすでに数十人いるのではないのでしょうか。その調子です。どんどん興味を持って下さい。

One Young World Summitは、Havasという広告代理店がイニシアチブを取り、世界中の企業の協賛の元に2010年から年に1回開催されています。私が参加した2014年のフォーラムは、4回目の開催です。開催地は毎年異なり、過去3回はロンドン、チューリッヒそしてピッツバーグで行われました。

開催の趣旨は、緊迫した世界の諸問題に対して行動を起こそうとする次世代のリーダーたちのプラットフォームとなる、ということです。要するに、若者のネットワークづくりです。フォーラム期間中は、先に述べたようなゲストの講演とあらかじめ参加者の中から選出された代表のスピーチ、そして小グループに分かれてのディスカッションが行われます。またネットワーク作りが主な目的に掲げられているだけあって、「Networking」という、メシでも食いながらおしゃべりするのための時間もプログラムに組み込まれていました。もっとも参加者はみな、色んな国の人々に会うために来ているので、その時間以外にも会場のあちらこちらで雑談をする姿が見られました。私は南アフリカ人のファッションデザイナーと仲良くなり、講演をちょっとスキップして街をブラブラしたりしていました。講演の内容から多くのことを学ぶのはフォーラム参加の価値ですが、誰と仲良くなるか、というのも、それと同じかそれ以上に重要な価値だと思います。

このフォーラムは、世界中の企業の協賛の元に成り立っています。しかし参加費・渡航費は原則自己負担なうえ非常に高額です。そのため参加者は皆、各自の参加費・渡航費をまかなうためにスポンサーをつけてフォーラムに参加します。スポンサーは参加者の所属企業だったり、参加者がオファーをして自ら見つけてきた企業だったり、様々です。

この点について日本は特別な体制をとっています。日本にだけ「One Young World Japan Committee」というものがあるのです。ここに参加を申し込み、審査に通れば、日本代表として自動的にスポンサーからの援助を受けられる仕組みになっています。とてもありがたいです。ちなみに今年度の日本代表30名へは、Evertoronという企業がスポンサーになってくださいました。

このフォーラムで私が得た最も大きな学びは、「地球は地続き」だということです。One Young World Summitには、世界中から参加者が来ます。名前も知らなかった小さな島国や、

シリアやクルドなど紛争の最中に置かれている国からも、北朝鮮から脱北して、現在は韓国で生活している女の子も来ていました。彼らは自分たちの身近に起こっていることに対して、それぞれの問題意識を持っています。それらの問題は、今まで私が自分のいる世界から遠く離れたところで起こっていると無意識に考えていたことばかりです。しかし彼らと同じ空間にあつまり話をする中で、また彼らの血液の通ったスピーチを聞くことで、机上で議論する諸問題の当事者は、自分と自分の周りの人々と同じ「人間」なのだということがリアリティをもって感じられたのです。全ては自分のいる世界の延長線上で起こっていることなのだ。そこから、全ての社会問題が自分に関係があると考えられるようになりました。

「地球は地続き」という感覚はおもしろいものです。この感覚が腑に落ちると、いろんなことが身近に感じられて、興味を持てるようになります。自分の興味のある世界がひろがるというのはとても刺激的で楽しい経験だし、自分の可能性が広がるチャンスでもあります。

私はこのすばらしい体験ができるOne young World Summitを必ず日本で開催したいと考えています。よりたくさんの日本の若者がこのフォーラムに関わるには、それが一番の方法だからです。実はすでに、2017または2018年の日本招致を実現させるために友人たちと活動を始めています。これを読んでいる皆さんの力も、ほんとうに必要です。日本招致に向けた私たちの使命は、日本の若者がもつOne Young World Summit への想いを、ロンドンの本部に示すことです。興味を持った方は、superegamarket@gmail.com (久保)まで、いつでもご連絡ください。

私たちは日本で、One Young World Summitを若者の一大ムーブメントにします。小さな地球が日本にてつくられるのは、なんて素敵なことでしょう。